税に関する高校生の作文

高田税務署長賞

魅力あふれる図書館

新潟県立高田北城高等学校　一年

市橋　蒼來

私は、幼い頃から本を読むのが好きだ。物心ついた時から本はいつも身近にあり、週末は家族で図書館に出掛けていた。家の近くにある直江津図書館は、上越市が運営している。蔵書数は約七万二千冊を誇り、鉄道図書コーナー、ティーンズコーナー、図書室などが設けてある。同じ施設内には、「こどもとしょしつ」があり、絵本など小さな子も楽しめる本が揃っている。

年間、家族で約百二十冊の本を図書館から借りているが、書店にはない本も取り扱っている。本を選ぶ際には、他人の評価や評判に左右されず、先入観を持つことなく本に向き合うことができる。高価な本や専門性の高い本もあり、アイデアのヒントにもなる。そして何より、私は紙の本が好きだ。紙の方が、深く集中して読めるのだ。

たくさんある本を自由に無料で、何の制限もなく読めるのは不思議だといつも感じていた。気になって調べてみると、図書館法で「図書館無料の法則」というものがあり、入館料や資料を使う中で、お金を要求してはいけない、と定められている。それなのに、上越市の図書館の利用率は、人口の約二割しかない。学校や市役所、病院、消防署などの公共財にももちろん税金が使われていて、当たり前に利用できるようになっている。しかし、そうしたものと比べると、かなり低いことがわかる。確かに本を読まないという人も増えているかもしれないが、図書館を利用して本を読むことで得られるものはとても大きいはずだ。もっと多くの人に図書館を利用してほしいと思う。

本に親しむ機会を、子供の時から作れるよう、上越市では、「はじめての絵本事業」を行っている。出生時に絵本を一冊贈呈するほか、読み聞かせにおすすめの絵本も紹介してもらえる。この取り組みは、読書活動を活発に行ったり、集中力や文章を速く、正確に読む力を育んだりすることにつながる、とてもよい取り組みであると考える。

私の人生において、読書は非常に大切な経験だ。私の目や心を楽しませてくれた本。悲しいときや辛いことがあっても、一瞬で元気が出た本。何者にもなれ、どこへでも行ける本。そして、本を無料で何冊でも読める環境にいた私。これは、税金を納めていただいた多くの人に支えてもらったおかげで成り立っている。

これからもたくさん本を読み、立派な大人になりたい。そして、税金をしっかり納め、今まで自分が気付かないうちに受けてきた税金の恩恵を、社会に還元できるようになりたい。